

古本屋の戦後



古本屋はセンス

田中和隆

一九五五年三月、福岡の現在地で古本屋になった。組合加入金一五〇〇円を渡してアルファベットHのゴム印をもらった。防犯のため奥付に押すものだが、後年組合長さんはなんと愉快な記号をくれたものかと思っただ。なじみの古書店に開店の挨拶にいくと客からの突然の変身にびっくりされた。週刊朝日定価三十円が十円、人気のコンサイス英和三八〇円は三〇〇円で売られていた。本誌は一部五十円で一九五二年から購読していた。近くの店の先輩が新米の店をみて一日の売り上げは五〇〇円、と予想してくれたが、本当だった。そんなむつかしい場所が現在は市営地下鉄駅と福岡ドームの近くになり店のまえばざつと二十倍もの通行人がある。

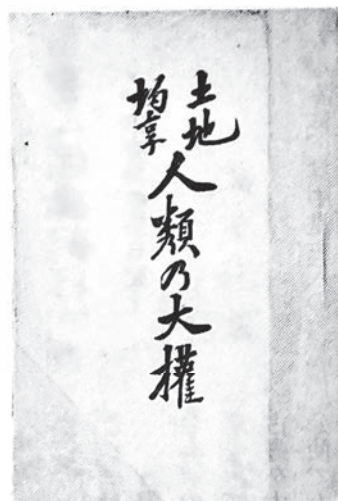
さきの先輩のしりについて交換会にかけ、せどりーではなく店ぬきの味を覚えていった。交換会は地元福岡と小倉で月二回、久留米、大牟田、佐賀、熊本では一回であった。外出のときの持ちものは大風呂敷で、一杯にすると二十キロぐらいになり、菊判の本で三十冊は包むことができた。とはいっても先輩とは大ちがいの細身ゆえ、二十分も歩くと肩にかついだ荷物ごと全身が沈むようである。また、振り分け荷もあつて、この格好は仲間の老いも若きもおなじなのであつた。もちろんそうすることは嫌ではなく、時の一風俗として誰が見ても異様ではなかったろう。その日は店ぬき目的で同業をまわったあとで、お寺や貸会場の交換会に出席した。店にはいるときは先輩より二、三步はあとにし、物色するのも遠慮から後手にまわって、目のまえで悔しい思いをさせられたものである。

『基本図書時價便覧』(日本古

書通信社編集部編、一九五二年)は最初に手にした初心者には絶好のガイドブックであつた。辞典全集叢書類一二〇〇点が親切な小売値つきで収録されている。流通する古書の基本図書や学術書美術書などは戦前のものも多く、新刊書もいまほど多種で多量ではなかった。古書の勉強は書誌や目録を読んで現物にも接することである。今日のように文化の情報が発達し施設が充実して自由に利用できれば、商品知識の習得は正確で早い。使った書誌は本庄栄治郎、高木慶雄、遠藤元男・下村富士男さんのものなど、目録は一誠堂、明治堂、巖南堂、文学堂、時代や、臨川さんのものだったが、机上の独学に熱中して現物の勉強は留守になったので、知識の習得は遅遅として進まなかった。

本誌に載った「古本屋の手帖」「ききめの話」時價目録、稀本番付、販売目録は有益であつた。販売目録欄には創業の年に一回、その後十年間には九回掲載させていたのだ。そのおかげでお客様の名簿が整って一九六〇年までに五冊の目録をだすことができた。いまとおなじ人文科学系で、珍しいものや値が張るものには交換会や同業からのものが多いことに気づく。交換会とセットの店まわりは初めは単純に仕入れのためであつたが、しだいに店買いや宅買いにはない自由さやさかんな好奇心を満足させてくれることが堪らなくなつて、せっせと励んだ。各地の御同業からたくさん本を分けていただいたが、売り惜しみとかいやな顔をされたことを思い出さないのは幸せである。

はじめのころは気負いから、ひとがやっていないことをやりたくなるものだ。五年目に先輩たちの目を気にしながら電話番号帳に小さな古本売買広告をのせた。誰にも相談せずに市内古本屋地図を作ったのは三年目である。福岡市組合二十名全員の活版一枚刷りで、うれしいことに後に組合が作った組合員一覧表に使用された。そういう積極性が注意を引いたのか、あるいは若い者が必要だったのか、さつそく組合役員になった。そのころは役員全員で交換会の実務もしていたのであつた。役員は二、三年毎に選挙で決まり、とうとう九二年まで三十一人留まつて組合の仕事を手伝うことになった。福岡玉屋百貨店の即売会に七八年まで二十年間約八十回休まず参加したことも忘れ難い。会社が古書即売会を文化的催事として認めてくださった。社長さんの九州古陶磁器を集めた公開の田中丸コレクションは有名である。こうして組合と即売会とは同時進行して、娘たちの誕生から成長後まで(かみさんの髪色の変化を誘いつつ)日目のくらしのなかに深くはいつていった。



担当へ問い合わせたり、図書館で地元新聞を繰って大正末年以降の関連記事を書きとるなどの試みがなされた。ちょうどそのころ庄倒的な『東京古書組合五十年史』(一九七四年)が刊行された。私達はこの労作から内容や編集など多くのことを教わりたいと思った。このような経験から、組合史は小さな努力の積み重ねが必要であることがしだいに理解できるようになった。ところが残念なことに七八年になって、頼みとする古本屋二世Oさんの急死にあい意気消沈して、与えられた仕事はほとんど先へ進まなくなってしまったのであった。

一九六八年は明治百年であった。出版界では前年から江戸・明治・大正・昭和を対象とする明治百年記念出版が活況を呈した。わが業界では例えば、全国の朝日新聞に西武池袋店による全一段の古書買入広告のせられ、暮れには明治古典会の公開展覧大入札会が開催された。このころからであろうか、明治以後の有名人の手紙や原稿など肉筆物の価値が再認識され、人気をよぶようになる。当地でもお客さんやマス・コミから「こんどの古書ブームはどうですか」と好意的にたずねられることがあった。それには地元を代弁するような調子で、うれしいことではあるがあまり実感はありません、と返事をしていた。のちに初版本ブームとよばれた際にも或る戸惑いを感じた。いまでは自分がもしこの三文字に素直になれて、そして機を見るに敏であったなら、と思う。

即売会や大市の折りには御同業が店にみえる。晩年の探書旅行をひとり楽しむ方の姿も幾人かおみかけした。同業は八〇年頃までは多かったようである。私は若いころから同業のどんなお店にも行くかわりに、

同業のどなたがみえても、みんなおなじお客さんと思つてきた。わが家では師走の御同業をサンタさん、とよぶことがある。ただし一般のお客様にとって、店で業者といっしょになることは即売会とおなじように、あまりいい気持ちではないかもしれない。そうおもつて自分だけは気をつけることにしている。神田の巖南堂・西塚定一さんが店にみえたのは一九七〇年頃であった。西塚さんは十年ほど前には全連理事長をなさった社会科学の大家である。緊張しながらお話しをうかがっているうち、自分はキャリアがありませんから、と申し上げると西塚さんは即座に「君、古本屋はキャリアじゃないよ、センスだよ」とおっしゃったのであった。この一言は気に入って、いまも、なくてはならないものになっている。

一九六八年のことである。市内のある著名なジャーナリストの蔵書を整理することになった。明治文化全集二十四冊のほか歴史関係に分けてもらった。なかには明治後期の社会主義書が三十五冊あった。明治二十九年から四十年のものでは片山潜『鉄道新論』『都市社会主義』幸徳秋水『平民主義』『革命奇談』神怒鬼哭『田岡嶺雲』『霹靂鞭』横山源之助『明治富豪史』『久津見蔵村』『無政府主義』山口孤剣『社会主義と婦人』があつて、そのほとんどは故人が出版当時に購入されたものであった。御息は別居されて、御父上の本を多く引き継いでおられる読書家である。来店されたり伺ったりしているうち書棚に『土地均享・人類の大権』(宮崎民蔵、明治三十九年二月、東京・新進堂、定価十五銭を見つけた。この本ことはなにかで知っていたのでおたずねしたが、手離せないとのこと。ところが、御息と行き来がなくなつて十年程のちの九二年に幸い蔵書整理のはなしがあつた。しかし、頭から離れることになかった、裏表紙に斬天生と御父上の記名のある、あの本が見つかからない。やつと探しあてたときは感激して、ありました、と家人に報告したのであつた。そのとき『麵鮑の略取』予約出版に就て(明治四十一年十二月)という平民社の一〇七〇字の一枚刷りが見当たり余白に御父上の書き込みが残されていた。「熊

本評論四十一年六月所載」云云で、このことから当時「熊本評論」を購読されたのではあるまいか、と想像したのである。この地方紙は明治四十年六月から四十年九月まで、発禁の第三十一号をもつて廃刊となる幸徳派最後の半月刊機関紙であるという。しかし、整理の際には新聞も雑誌もなく、勉強家の蔵書にしては不自然である。実は以前、御父上の家で老奥様から、古いものは燃しました、とお聞きしたような気がする。かさねて御息の奥様が同じことを、今回ははつきりとおっしゃったことから、貴重な文献のはかない命がようやく悟られるのであった。『土地均享・人類の大権』は薄い本で厚さは五耗しかない。それだけに新聞などと運命を共にすることなく生きていくことが、うれしい。私には推察するしかないのであるが、前記の明治の思想書などは敗戦までのながいあいだ、所有することさえ身の危険をとまなうものであったようだ。これらの本はその誕生のときから、一人の賢い読者に守り通された果報者であるといえるだろう。

(福岡・田中書店主)